



まちでくギャラリー

2014年5月～6月の展示 長谷川誠・森山恒逸

#5



芸術と日常は紙一重なのでしょう。

芸術が特別なものだと、一部の才能に恵まれた人にだけ託される技能だとすれば、普通の人にとっては想像力など必要のないものだということになってしまいます。

朝、東の方から太陽が昇って、西の彼方へと沈んでゆく決まりきった繰り返しこそが日常であり、繰り返すことが少しづつ変化をしていつの間にか新しい日常になっているように、変化こそが命を繋げて新しい何かを生み出しているのだと思うのです。

しかし、紙一重の紙の厚さは永遠の距離とも同等になることもあります。その違いと等しさが、芸術なのかもしれません。

そしてそれは、芸術とは何かという答えには少しもなっていません。ますます不可思議な落とし穴のように暗い口をぽつかりと開けて、漠然とそこになります。漠然と、ものがあり、曖昧な海に出ては吹く風や波に助けられたり邪魔をされたりしながら、潮に焼けた肌もだんだんしわが深くなり、目もかすんでくるだろう。想像の放浪、日々繰り返しているうちに霞んだ海の霧の中に何かが見えるかもしれない。それが変化。

今回2014年5月、6月展示分の長谷川誠さんと森山恒逸さんの「マチでくギャラリー」（4回目）の中から数点の写真をここに掲げながら私の感想を併記して記録どしたいたいと思います。

「マチでくギャラリー」ははがき大の作品写真を1人33枚ずつ各作家から提供をしてもらい11カ所ずつ展示して、2ヶ月ごとに繰り返しています。

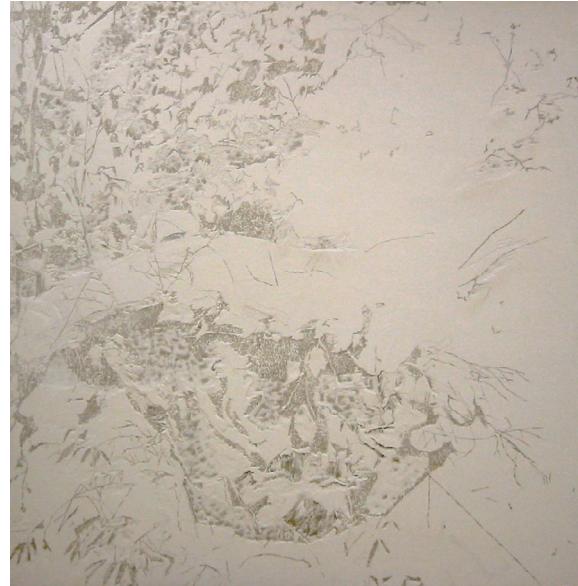
この冊子をその記録として作ろうと考えていますが、どうしても主観的な構成になってしまい、客観的な記録とはいがたいものしか、今までできませんでした。これから先も、来客観的な視野を持ちうるか、きわめて望みは薄いですが、記録というからは、それをを目指したい、いや、ねばならないでしよう。写真を提供してくれる人のためには。
それには編集方針から考え方ではなくてはならないでしょうが、舌の根も乾かないうちから、雲石の松崎しげるさんに連載で私小説風の日常を書いてもらうなど、少しの反省の色も感じられません。あくまでこれを企画している者の主観とこれに賛同して写真を提供してくれた人とのコミュニケーションになってしまいます。

また、この「マチでくギャラリー」と冊子を側面から援助してくれている、土沢の人たちにとつても共有できる感覚のひとつになりうる、小さな文化のかけらになれば良いなと希望しているのです。



見えないコントラスト

菅沼緑



遠いゆきどけ 09 長谷川誠



遠いゆきどけ 1

「雀はどうして空を飛ぶのだろう?」という質問が子ども電話相談室に寄せられたとして、自分だつたらどう答えるだろうかな、と想像したとします。「それはね、空には犬や猫がないからだと思うよ。」と天敵のことなんか話をするかな。羽の仕組みについても簡単な説明をして「あとは自分で想像してご覧よ」っていたくなるだろうな、自分だつたら。「答えは想像した人の数と同じだけあるんだからね」、とか「多少、ほんとのこととずれていても、そうかなあ、ほんとうかなあ、どうしてだろう、と考えたり想像をすることが僕にはとっても大事なことに思えるんだ」などといい加減なことを自分にも言い聞かせながら、答えるまねを夢想したり、仮の質問を想像し、仮の考え方まで考えてみるのは結構自分勝手な偏った想像に満ちあふっていてすこぶる楽しいものです。そんなの答えになつていないぞ、間違いだと、指摘する振りのオブザーバーまで登場させられ、さらに興奮する事態になるのでしょうか。

人の作品を見て、感じたり、あるいは感じなかつたりしたとしても、やっぱり仮の質問を想像してみたりしています。さらに、こうしてなげなしの言葉を並べて、作品の感想もまだ形にならないまま思いに形を作ろうとしている相談室の回答者然として自分に答えようとしているのです。

自分の中の單語帳を擒んでパラパラと振つてページの間からこぼれてくる新鮮な言葉がないだろうかと、繰り返し試してはいるものの、何度もこうして同じところをぐるぐると巡つてていることでしょう。

「雀が飛ぶわけ」と同じような疑問のひとつに「どうして人は芸術をするのだろう」というのもあって、それは私にとっても20歳の頃からの黄ばんだ疑問で、テーブルクロスの上にある小さなシミのようでもあります。50年近く前の記憶と、全く前進しないぐるぐる巡りとシンクロして、そこでも「自分で想像してみたら・」と繰り返し声が聞こえます。

「想像するだけなら簡単だろ」と、どこかから聞こえてくる声を背中に聞きながら、芸術という満員電車の溢れる乗客の中に押し込まれるように私は、この想像電車に分け入り、人の作品の芸術の背中を押しながら車内に進もうとしています。

雀は飛べるから飛ぶんだつていうように、もちろん訳もなくなるされる芸術だつてあるだろうけれど、(もし寛大な鑑賞者がそれも芸術の範疇に入れることを許してくれればの話だけど、あるいは自分がそう信じるなら)そんな作品の作者であつても俺の作品の中に土足で踏み込むんじゃない。とんでも迷惑だ、といわれ嫌われることもおそれず、いや、わからず、人の領域に踏み

込みます。

その想像が勝手に、いわば各人の中で勝手気ままにと言つて良いかと思うけれど、ものを作り、描く人々の中で、その人の歴史とともに想像が勝手気ままに形成されてゆく過程。そこに芸術の訳があるのかもしれません。

そこで、今回の長谷川さんの作品の何と薄められたコントラストよ。

薄い色の「白」い石膏に刻まれた「白」い線がそこにあるかないかの、森の風景を映し出しているけれど、長谷川さんにとってはそれこそがコントラストなんだろうか。

長谷川さんにとってのコントラストとは、視覚的に比較するコントラストではなくそこにある形の存在そのものが長谷川さんにとっては、山に暮らす、山に感覚を与えて自分の命に糧とする人の、あるべきコントラストであり、存在なんだろうか。そして見るものに想像を強要する側と、させられる側のコントラストもあるのかもしれません。

白い石膏の平滑な面に写真のようにリアルな画面を浅く彫つてその表面の平滑さを消し去ることで、平滑な白との差をつけ、コントラストにする。

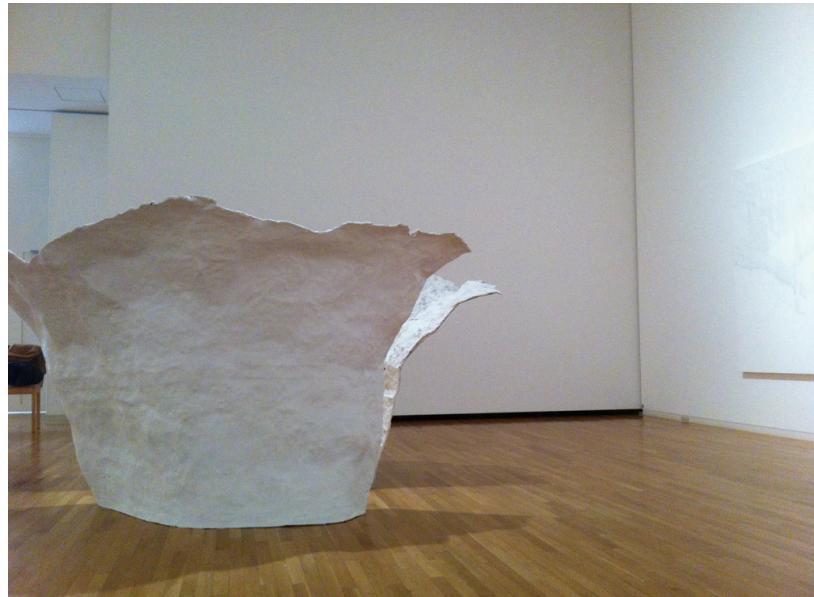
そのことで、白い石膏にイメージを与えるのだから、そこには有無をいわせないイメージの強烈な伝達など生じようもない。それはごく控えめなイメージというのだろうか。

どうもそうではないような気がしてなりません。基本的に、表現をしようという人間が控えめな表現で満足などする訳がないはずなのです。

寡黙な人が強烈なイメージの持ち主であることは、日常の中でもさんざん体



「触覚の森-13」



「きのかたち 92-08」

感する事実だし、寡黙が沈黙などではなく内的想像ではじつに饒舌なのです。しかし、表現というのは直接的な表現ほど訴求力の何ものも力を持たないことも事実です。

いくら饒舌に百万言の言葉を労したところで芸術にはならないのです。

「芸術はメタファーだ」という村上春樹の話しさは事実だと思う。「リンゴが赤い」などといつても説明でしかないように、暗喩に隠れていることがらが、見えないコントラストだと思うのです。

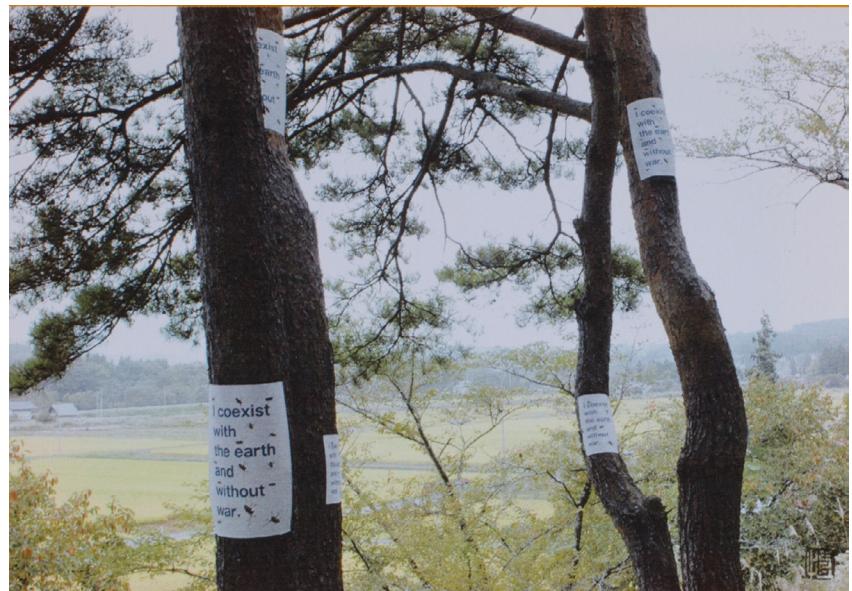
見えないコントラストは表現の根源的な出発点になる、存在の確認から始まって、表現そのものに対する疑問符の絡まる厄介な問題をはらんでいるように思いますが、長谷川さんの自己主張はコントラストを極限まで薄めながら、表現意欲はおそらく最大限の活動なのではないかななど、ふと感じます。それこそがメタファー、暗喩。

(すがぬまろく)

見えない社会

作品タイトル「意思表示」——作品の写真ということでなく、この写真が作品ということで $100 \times 150 \text{ mm}$ サイズで 35 点提出し、まちでギヤラリー展示となつた。

それは、4th 街かど美術館 2009 アート@つちざわ〈土澤〉に参加発表した作品（インスタレーション）画像から切り取り、作品になつた。2009 年から 5 年、ますます、争いが絶えない世界に在つて、私の美術作品概念に於いて、作品表現「I coexist with the earth and without war.」日本語では「ここは地球、武器で争いは無し。」——私が生きてる意味を創造し、静かで穏やかで力強く、意思表示する日々に在る。——森山恒逸 — 2014・10・2



「意思表示」

この小冊子を作るに当たつて、私が書いた文章をあらかじめ森山さんにも送つて、確認をしてもらいました。

しかし、私の文章があまりにも主観的で、あいまいな表記に過ぎていて、森山さん自身の表現しようとしてきた自然ということや、平和（あるいは、地球）についての概念がおろそかになりすぎていることへの指摘への対策として、最低限、森山さん自身が想像する、作品の事実を示すために、冒頭の一文を挿入して欲しいという森山さんの希望がありました。

森山さんの表現しようとしてきた行為は作者本人の永年にわたる嘗為の結果

果であり、個人としての存在の証しともなるべき痕跡でもある、ということへ更なる恐怖をもつて当たつて欲しかったということであつたと思います。

その反省と第 1 稿に少々の手直しと推敲を加えて掲載をしたいと思ひます。

森山さんは原発の事故に対して、以後の再稼働は阻止したいという意思表示を明確に示すために、メッセージを書いたプラカードを持って毎月のように近所を散歩（これも散歩ではなく、意思表示だということ）しているといふことです。

そもそも社会など半分はプロパガンダでできているといつても過言ではないくらい、社会とイメージは異質でありますから、複雑に重なりあっています。それをいかにも同質に見せかけたいという意思がプロパガンダを作るのでしよう。

政治と経済が高度な発展をする方に見せる一方、自然とともに暮らし、素朴な生活を送り、自他共にかかる負荷の少ない生き方を求めて、さらに実践にまで具体化している人もたくさんあります。

人類の発生から永い間その営みは自然な現象なはずです。空気を吸い込み吐き出す。それだけだったところに想像力というものを得てからの営みにおいては理不尽の排除に懸命になり、科学を体系化して、加速度的に自然を排除せんにはおられませんでした。現代においては物質的な空間で、便利な物



「意思表示」

に囲まれて送る生活を「文化生活」などと表現して、生活を豊かにするのが資本主義の成果であるとすら感じられた時代がありました。

それこそプロパガンダ。

人類が地上で二足歩行を始め、自由になつた手にモノを掴み猿同士のいさかいに地面に落ちていた骨を拾い、それで相手を打つ。コブシで殴られるより激しいショックに驚き慌てふためいて逃げる猿。

勝利を味わつた猿は雄叫びをあげて、手にした骨を空高く放り投げる。青い空に白い骨がくるくると回りながら舞う。「瞬、白い骨は暗黒の宇宙を漂う宇宙ステーションに変わつて観客の視線そのものが白い骨のかわりにくる」と宇宙を舞い始め、ヨハン・シュトラウスの「青き美しきドナウ」のメロディに乗つて、猿が手にした道具はついにここまで発展を遂げて人類は宇宙を自由にするまで至つたことを謳歌するように。

あの「紀元2001年宇宙の旅」はそうして始まつた。

だけど、本当に道具は人類に自由を与えてなどいない。物理的なモノの尺度から見れば、比べ物にならないほど現代はモノを自由に使い分け、時間と空間をも極端に縮め、変形もさせてきたのです。

だけど、質量に関してはどでしよう。ましてや、時間の質量や空間の質量に関して私たち、それらをスポイルしたまま時間と空間だけを変形させて、それを自由にしたと思い込んではいないでしようか。時間と空間を理解する、ましてや心的な質量に関しては手付かずといつても差しつかえないほどではないでしようか。

それはもちろん、哲学の分野で深く静かに潜航するようにさまざまな思考

「意思表示」



「意思表示」

がなされているのだけれど、社会は現実に行われている事実の表面で全てを判断して、いつたん判断を下されば、それは「事実」とか「現実」という判子を捺されて、それ以上は先に進まない一種の制御を課せられてしまうからではないでしょうか。

社会というのは實に恐ろしいものだと思わざるを得ません。

いつたん決められてしまうと、一度、現実という枠にはめられてしまうと、大きな川の流れのように誰にも止めることができなくなってしまう。その川が実際に流れ下つているわけではないけれど、それが見えないだけに、「現実」という川はそうと決まつてしまえば、それが「現実」ということになつてしまふのではないでしようか。

社会という大きな構造の中で、言葉や習慣風俗などのつくり出す現実といふものは、そこの中に生きる全ての人の生活に関わる事実として影響してくれるからどんなに、その現実がねじ曲げられ、悪意に満ちていようがそれは受け入れざるを得ないくらい、社会という川はいやおうなしに私たちを流すのです。

社会という川とその中に生きつつも、想像力を働かせる日常の生活との差にプロパガンダは必要不可欠な存在として、潤滑油のように受け入れざるを得ない部分もあるのだと思います。

だから、人間が作り出してきた想像力のゆがんだ社会の制度は、制度として動き始め、川になつてしまつた時から、多重の思考と生活を私たちに余儀なくしているのでしょう。私たちは「制度の中」で芸術をたしなんでいるだ

けなのなのでしょうか。

そうじゃない！

想像力がゆがんだのではなく、その使い方を誤っているだけなのだが、「何が」おかしいのかわからないだけなのです。その「何が」大問題で、ポアンカレの予想を解いたグレゴリー・ペ렐マンのような超人的な集中力には呆然とするばかりですが、「想像をする世界」に形を与える可能性にこそ私たちの想像力を駆使するべきなのでしょう。

想像力の積み重ねは現代においては単なる想像を超えて、新しい地平を次々に表しています。その地平の手前には大きな川が流れ、無数の想像が折り重なりながら形作られる世界の中でその主張を呼び合っています。

森山さんの作品は木々に「私は地球とともにあり、そこに戦争はない」という意味の英文を記したポスターをたくさん貼ったものです。

人間の文明、物質が戦争を糧にして発展を遂げて、すそ野の技術がカーナビになつたりパソコンになり私たちの生活を変えてゆきます。

あの空に放り投げられた白い骨から始まつた武器の歴史が経済と結んで今になつているのです。

残酷な歴史の中で全体は流れていますが、「個」は夢を見ます。

歯ぎしりゴマメじやないぞ、というところが肝心です。川の向こうの想像。彼岸の想像こそが形を与える可能性であり、矛盾なのかもしれません。

「意思表示」



「意思表示」

この矛盾を私たちは芸術として何とか補償しようと躍起になつていています。

個と社会という大河に横たわるその矛盾こそが想像の糧でもあるのかも知れませんから。

森山さんはかつて、朽ちた木の枝の表皮の下を虫が食い荒らしたその模様を黒い絵の具で塗つて作品としていたことがあります。

森山さんの提示するその作品が森山さんが作ったものではなく、カミキリムシの幼虫が作ったもの、いわば自然の営みのひとつとして、虫の命と朽ちかけた樹木との共生から生まれたものです。それを自分の作品として森山さんが発表することには、いくつものメッセージが重なり合つて含まれているのです。

作品という物も、いつだつて單一ではなく複相的にいろんな要素が重なり合つて見えていています。しかもその見えていることが、直接眼に見えていることではなく、それこそ長谷川さんの所でも書いたように「メタファー」として何かを象徴するのだと思います。

だから、カミキリムシの幼虫の噛み痕や、短く切り取られたその小枝の大きさや模様からメソポタミア時代の粘土の円筒印のように見えたりしますが、それは見る側の勝手な判断というか、思い込みからそう感じるだけで、それは「メタファー」でも何でもありません。

メタファーは社会と個人の差から見える大きな川の大きいなる矛盾そのものなのかもしれません。

(すがぬまろく)

しづくいし奇譚 —切り抜き帳より

藤崎しげる

6月8日の朝、僕は零石駅からこまち14号東京行きの列車に乗った。M子と都美術館で待ち合わせをしていたからである。バルテュス展が開催されていたのだ。小雨模様である。列車に乗り30分ほどして雨が強くなってきた。それからしばらくして列車の窓から青空が見えた。約2時間半の旅である。僕は上野駅で降りた。これがいけなかつた。約束は都美術館前午後2時である。僕は上野駅で迷ってしまったのだ。僕の郷愁からだつたのかもしれない。やはり東京駅にすればと思って仕方がない。上野公園口に出たのは午後2時30分過ぎである。急ぎ足で都美術館の入り口に向かう階段を降りた時、携帯電話が鳴つた。振り向くと、階段の上にM子がいる。思わず僕は手を振つていた。若い頃の心境になつたことを覚えている。2人は館内に入りチケットを買う。人で込み合つてゐる。別々に見ることにした。僕は一枚の絵（タイトル不明、図柄明確）の前で立ち止まり、直ぐ様館内を出て外の植え込みのところでM子を待つことにした。僕は晴れ男だと自負しているのだが、又々小雨が降つてきた。M子は雪女かななどと考えてゐると、それから20分程してM子が出てきて植え込みの僕の右側に座つた。僕は女性と2人で歩く時も座る時もいつも左側に位置する。寝る時は別である。久し振りの上野公園は怪しき天氣模様にもかかわらず、僕の気持ちは爽やかだつた。公園内を2人で歩くのは初めてだつたかもしれない。銀座に行くことにした。地下鉄を4丁目辺りで降りライオンビアホールに入った。2人は突き当たりの絵が見える入り口側最後部右側の2番目の席に案内された。グラスで2杯の生ビールを注文した。創業80周年の旗が一際目立つ。食べ物はいつもM子に任せている。そこには僕の好きなものも必ず入つてゐる。それにしてもホールは満員に近い。2人ともグラスビールが2～3杯と進んだ。御機嫌である。そのうちM子はワインを飲み出した。いつものことだ。僕はもう一杯ビールを飲み干してから日本酒に変えた。「あなた大丈夫…」というM子の声が、突然僕の耳に去年13年夏の零石アルペン広場の蝉の声、いや僕の眼に今年5月の

満開に咲いた桜の風景が浮かんだ。我に返ると、眼の前にいるM子の顔が一変している。次の瞬間、2人の空気が、いや僕1人の空気が危険信号を発していた。その後、満員に近いホールの喧騒の中に残された僕は天井に淡く輝く磨りガラスの水色とピンクの丸い明かりをただボーッと見つめていたのだった。

僕は花園神社にいた。1人である。つくづく今日は日曜日なのだと確認する。明日は雲石に帰らなければいけない。僕は神社に手を合わせてから、左側にある階段を静々と降りた。ゴールデン街に行くのである。と交番に眼をチラリとやり通りを見歩くまでもなく、クラクラという文字に引き付けられた。2人の客がいた。ビールを注文した。しばらくして店主で椿組座長のTb氏が稽古から帰ってきた。二言三言会話をし店を出た。その後、僕は3件程店に入り新宿駅まで来ていた。トイレに行き、ジーンズから夏用の薄いズボンに穿き替えた僕は携帯電話と財布をポケットに入れ駅構内を歩き出したのである。それから僕は新しくなった駅周辺を夢中になりカメラに収め捲った。駅構内の床に座り一息つき何気無くズボンに手をやると、電話も財布もポケットに入っているのだ。僕は慌てて撮影した場所を探し回ったが、2つとも見つからない。情けなくなつた。アルタ前の東口交番に紛失届を出してから、再び駅周辺を歩いた。見つかるはずもない。一睡もせず、朝になつていて。諦めるしかない。それでも僕は新宿が好きなのだろう。電車が動き出していたので、Sr氏から預かっていた冊子を画廊に届けるため神田に行くことにした。バッケに残っていた小銭でパンと缶ビールを買い、口に入れてから電車に乗った。神田駅でどうにか降りた。SPC画廊に向かって歩いたのだが、昨日からの疲労も重なつたのかなかなか着かない。「止めた、ギャラリー現の方からにしよう…」と自分に活を入れるように声高に叫んだ。母の顔が浮かんできた。文無しに近い状態でタクシーに乗つた。もちろん運転手さんに話してからである。彼は不安な顔をしながらもギャラリー現のあるビルの前で車を止めてくれた。車を待たせ、3階の画廊に行き、Kjさんからお金を借り車代を支払いホッとため息をつきすぐ画廊に戻つた。後輩のWmくんが発表をしていた。Kjさんと談笑していると、見知った顔の男が現れた。やはり大学の後輩である

Ks氏である。10年10月の雲石YPギャラリーで行つてくれていたNmさん個展以来の出合いだ。僕は懐かしさの情になつた。車で来たらしい。僕は彼の車でSPC画廊まで送つてもらうことにした。Wmくんの作品を見てから2人でギャラリー現を後にした。Steps Galleryへの冊子はKjさんにお願いすることにした。途中、僕はKs氏に一年前に亡くなつた友人である女性Iyさんの遺作展をしている藍画廊に行くことを頼みドアを開けにに入った。彼女の作品が画廊の白い壁に並んでいる。Kさんに「そうか、ちょうど一年前だつたのか…」と僕は預かつた冊子を手渡しながら、心の中で深く鎮魂していた。「さて、行こうか」とKs氏に声をかけ駐車している彼の車に乗つた。外は小雨になつている。僕は涙男かもしれない。SPC画廊に着いた。感謝する言葉が込み上げてくる。Ks氏が帰つた後、僕は我が家のような画廊の会話の中に心地よく埋まつてしまつた。一人ひとりの顔が一つになる。冊子を事務所のテーブルに置き、皆で乾杯だ。僕は煙草を一本貰い、東京のビルの間から見える曇り空に向かつて煙を吐いた。笑い声が聞こえている。午後5時30分頃、僕はなごり惜しさを手土産にタクシーで東京駅に向かつた。

愛情、友情に関しての証しとは、ストップすることが継続するとかの判断が未だ僕にはできないでいる。このことは、僕を信じることしかないので…。

遅くなりましたが、ここでまちでくギャラリー冊子に2人の作家を紹介します。

名古屋に住むKt氏は、どうしているだろう。彼との出合いは、70年初頭の神田ときわ画廊であつた。彼は自分の体のサイズを使用し作品としての精神を表現していたのだろう。僕にないものを感じた。最近は合うことがないのだが、いつも連絡してくれて僕のそばにいるような気になつてくるから不思議だ。

東京に住むNm氏は、どうしているだろう。彼女との出合いもやはり、ときわ画廊であつたと思う。彼女が制作する彫刻の形の鋭さ、又色、素材の明確さは、僕が求める物語性の曖昧な作品との違いを1人比較してみたこともあつ

た。その時、表現は多種多様であつてもいいのだと改めて思った。

6月9日の夜、僕は雲石の家に着いた。台風11号が近づく雨音を感じつつ、夜9時過ぎむし暑い居間の座布団に座り、「パリの空の下」の曲を「口ずさみながらテーブルの上に置いた東京から持ち帰った鰯鮓の弁当の残りを見つつ、こよなく愛飲している缶ビールの蓋をブシュと開けたところ…。

つづく(8月10日)



SPC 画廊で旧交を暖める

菅沼 緑

あとがき

5・6月分の展示の小冊子の発行が今になりました。この小冊子をまちでくギャラリーの記録として作っているのですが、記録だからこそ正確に記述をして事実と違わぬようにならなければならないのでしょうか、私はどこまでいつても正確に作るということがよほど苦手のようで、この1年の間に躊躇を2度も経験しましたが懲りたなどとは思いません。

1度目はこの冊子の発行にかかる経費を捻出するつもりで、クラウドファンディングにあげてみたのです。それは見事に頓挫をしてむしろ反感を買う結果となり、誤解も曲解にも弁解する気にもなりませんでしたが2度目のはかなり私自身の軽はずみでお為こかしな態度に強烈なクレームがつきました。この冊子の森山恒逸さんの作品に対する私の感想をあらかじめ本人に送り眼を通してもらおうと考えた所から始まります。

森山さんは自身の行っている表現活動に誤解を与え、書かれている感想は曖昧で、次へのステップも示されていない。こうした文章からは、森山さんがしようとしている行為が誤解される恐れがあるので、自分が表記した文章を載せてほしい。ということで、冒頭に送られてきた一文を挿入しましたが、その不満を解消するには至らず、むしろ不完燃焼を増長させる結果になってしまいました。

それは、あらかじめ眼を通してもらおうと考えて原稿を送ったことは、本人の意見を問うためにされたことだから、自分の希望と意見を伝え、要望をしたまでだ。そこで自分の意思表示を過不足なく読者に伝えるためには、本人の描いた文章がきちんと掲載されることが、条件だと思うが、感想は感想として発表するのは自由だしそれはそれで良い。しかし、あらかじめ原稿を送って意見を訊くのであれば、自分の意志はきちんと伝えてほしいと思うので、要望した文章や資料をきちんと掲載してほしい。ということでした。

私の感想を原稿として送り、校正を（実際には確認をという程度の意味だったのに）してほしいといえばそういう要望が出ることも、当然でしょう。それは非常に安易な私の発想でした。しかし私としては自分の感想を多少手直しはできても書き換えることはできません。あくまで自分の感覚で感じたことを表記することがやはりここでは自分の役割だと考へるからです。

しかしこうした経緯の中で、私と森山さんは電話に向かって激しく言い合いながら、表現とは何だ、具体と抽象について自らの考えを言い合いました。そして互いの表現に対する姿勢がまるつきり違うことが、はつきりと見えてきました。

作品の上で表現されることを、感じ取り鑑賞という行為の中で作品を感じ、表現を想像することがやはりかなり漠然となざされることが改めて実感されました。ある意味情けない結果でもありました。私が想像する表現とは『一瞬の出来事』として伝わる究極のコミュニケーションなのだとということを、改めて認識する結果がありました。

イメージとは一瞬なのです。その一瞬が時空を超越する現象——ともなるはずだと。そういう抽象をどのように具体にするか。それを見つめることが作品であり、この小冊子です。

「マチでくギャラリー」 #4
2014年5月6月の展示
長谷川誠・森山恒逸
花巻市東和町土沢商店街 22 力所
発行 東和町土沢商店会連絡会 2014年9月20日

企画・編集 toncacci atelier
花巻市東和町田瀬 14-120
代表 菅沼綠
roqu@me.com
<http://www.arttsuchizawa.com/>
<http://machikado.urdr.weblife.me/>

